

# 成果報告書

記入日 2018年 1月 29日

氏名： 南部真喜子	渡航先国名 パレスチナ/イスラエル	所属機関 ヘブライ大学トルーマン記念研究所
研究テーマ： パレスチナ被占領地における政治囚人の表象にみる英雄像の社会的形成		
研究期間： 2015年 6月～ 2017年 9月		
研究成果（概要） イスラエルの刑務所に収監されているパレスチナ人受刑者の問題に着目し、パレスチナ社会で長らくイスラエルの占領への「抵抗の象徴」とみなされてきた政治囚人たちが、現代の社会でどのように認識されているのか、そのシンボル性の形成およびその背景にある社会状況などを調査した。		
<p>&lt;研究成果（詳細）&gt;</p> <p>【目的】</p> <p>本研究の目的は、イスラエルの刑務所に収監されているパレスチナ人受刑者の問題に着目し、パレスチナ社会で長らくイスラエルの占領への「抵抗の象徴」とみなされてきた政治囚人たちが、現代の社会でどのように認識されているのか、そのシンボル性の形成と変容を調査することであった。また、そのような社会の認識が生まれる背景にある社会状況、および近年の逮捕や投獄の実態について理解を深めることであった。</p> <p>【背景】</p> <p>パレスチナ被占領地（本調査では主に西岸地区、東エルサレム、そしてイスラエル領内のパレスチナ人コミュニティを含む）におけるイスラエル当局によるパレスチナ人の逮捕、投獄は、1967年に開始した軍事占領以降続く制度である。現在では「逮捕経験のない家族が一人もない家はない」と言われるほど占領下のパレスチナ人にとっては身近な問題となっている。それゆえ、投獄経験はイスラエルの占領に対する抵抗の勲章であり、政治活動に従事する若者の間で通過儀礼と見なされてきた側面がある。しかしその一方で、近年に目を向けると、囚人への連帯を示す街頭デモには人が集まらず、以前と比べて人々の関心も薄れているといった声も聞かれるようになった。街なかには現在も収監中の囚人の写真が印刷されたポスターが飾られ、名前の前には「英雄」の敬称が付けられる。釈放されると、地元コミュニティからも盛大に迎えられる。そのようななかで、現地滞在中は、囚人問題に対する社会の意識は変化しているのだろうか？囚人の持つ英雄像に変化はあるのだろうか？ということ念頭に過ごした。また、近年では（政治）組織的な関わりを持たないパレスチナ人の若者たちが、単独でナイフなどの身近な道具を使って兵士や入植者と接触を試みる、従来とは異なる現象も見られるようになった。それに伴い、若者たちが逮捕のターゲットとなるケースも増えており、それらが個人や社会にもたらす心理的影響はどのようなものかといった問題意識のもと実地調査を行った。</p>		

## 【実地調査】

## ◆聞き取り調査

調査は主に、聞き取り調査と参与観察を通して実施した。聞き取り調査は、投獄経験のある人たちに当時の逮捕された経緯、刑務所内での生活、人間関係の構築や出所後いかにコミュニティに戻ったかという個人的体験から、個人が投獄経験をどのように捉えているのかを語ってもらった。また、現在家族息子が投獄中である母親にも、親の目線から子の投獄とそれに伴う日常の変化などについて話を伺った。逮捕や拘留、刑が下されるプロセスについては、同じパレスチナ人でも西岸地区と東エルサレム、また逮捕者が成人か未成年者かといった要因で法的措置が若干異なる。法廷でパレスチナ人の弁護にあたり、ときには刑務所を訪問するパレスチナ/イスラエル人弁護士には、このような複雑な軍事法廷制度について説明してもらった。また、出所後の若者に対して心理カウンセリングやサポートを行う心理士にも、逮捕や投獄がもたらす心理的影響について話を伺った。他にも、囚人問題に関するドキュメンタリーや映画を作製し、パレスチナにおける投獄経験を記録し問題提起する監督やアーティストとも、パレスチナ人受刑者に対する社会の目やあえて触れられない社会的タブー、新しい民衆運動を模索するなかでの課題など、囚人問題にとどまらず示唆的な意見をもらった。

インタビューでは同じ質問を投げかけても、当事者の世代や投獄されていた年代、年数によって反応が異なることもあった。その違い自体は興味深かったが、習得中の言語でその場にあった質問を組み立てることに試行錯誤した。その反面、想定していなかった方向に会話が転じることもあり、聞き取り調査は知りたい情報を入手するだけでなく、新たな調査課題や問いが見つかる学びの機会となった。また、こちらが投げかけた質問がパレスチナ社会の文脈でどれほど通じる疑問なのか、意味のある問題関心なのかといったことも対話中の些細な反応や語彙の選び方、言葉のニュアンス、そして聞き取りが行われている空間そのものから感じとることもあった。

例えば、1993年にイスラエルとパレスチナとの間で交わされたオスロ和平合意は、パレスチナ近現代史の中で一つの転換期として見なされ、一般的にはその前後を区分する際に「オスロ合意の前・後」といった言い方をする。現地ではこのような呼び方はあまりされず、かわりに「パレスチナ自治政府が（被占領地に）来る前、来た後（“Qabel ma ajat sulta”, “Baed ma ajat sulta”）」といった表現を多く耳にした。これは、それまで海外に拠点を置き、オスロ合意を機に被占領地の部分的権限をイスラエルから移譲され担う形で新たに設置されたパレスチナ自治政府のことを指しているが、多くの場合イスラエル当局との治安協力をはじめ、占領体制を下請けする立場にあると見なされている自治政府に対して批判的なニュアンスを持って発せられた（「彼らが来る前は平和だった」のように）。オスロ合意はパレスチナ社会に様々な影響をもたらしたが、かつての一体感や社会的合意が失われ占領体制をより複雑にした大きな存在として自治政府が人々の間で認識されていることが印象的だった。このことは、自治政府ができて以降、イスラエル当局のみならずパレスチナ治安当局による逮捕や投獄という問題が生じていること、囚人への連帯デモに対するパレスチナ警察からの抑制、そして囚人の解放などを要求する対イスラエルの路上抗議行動よりも自治政府の人権侵害を批判する呼びかけに人々がより集まるといった

日常の場面からも感じるがあった。他にも、1980年代に被占領地で民衆蜂起が盛んだった頃に投獄を経験した元受刑者に話を聞く際、当時は生まれていなかった20代の息子や親族が同席し、インタビュー後に「叔父さんが刑務所にいたことは知っていたけど、今まで聞いたことのない話だったから面白かった」と感想を述べられることもあった。パレスチナの民衆蜂起の時代が過去になりつつあることを印象づける言葉で新鮮に映った。

#### ◆参与観察

聞き取り調査のほか、様々な現場にも足を運んだ。とりわけ、滞在当初は聞き取りを行う人もいなかったため、囚人への連帯を示す街頭デモや集会など、比較的公的な場所でオープンに行われているものには積極的に参加し顔を覚えてもらいながら人脈を作っていた。そこで出会った人が投獄経験のある家族や親族を紹介してくれ、囚人家族の集会やコミュニティセンターで行われているワークショップなど別の機会につなげてもらうこともあった。また家族が釈放された時にはその元受刑者を迎える集まりに呼んでもらうなど、貴重な時間を共有させてもらった。月に2度訪れる刑務所面会の日には、国際赤十字委員会を通して事前に面会申請を行った囚人家族らが朝の5時から集合場所に集まり、用意されたバスで一日かけて刑務所を訪問する。家族がやってきてバスが出発するまでの間の時間に交わす会話を何度か重ね、改めて自宅で話を聞かせてもらうこともあった。このような現場は、聞き取りで知り得る個人史に加え、パレスチナ社会が経験してきた投獄の集団的体験とそこに纏わる様々な反応や感情にふれる機会となった。

また、西岸地区のラマッラーに拠点がある囚人とその家族へ法的支援を行う団体にも頻繁に通った。事務所を訪れる家族からの相談や雑談、刑務所当局とのやり取りなど、実践的な日常業務を見せてもらった。インタビューよりも非公式な場所で、囚人問題に関する話題や素朴な疑問に答えてもらい、非常に感謝している。法廷弁護士の方には、西岸地区にある軍事法廷に連れていってもらい、実際の裁判の様子を見学させてもらった。

#### 【調査を通して得た気づきと今後の課題】

今回の現地調査の目的は、イスラエルの刑務所に収監されているパレスチナ人受刑者の問題と、それらに関係する家族やコミュニティの実態を知り、抵抗の象徴としての囚人像が現在のパレスチナ社会でいかに形成され変化しているのかについて理解を深めることであった。聞き取り調査や、様々な現場への参与観察を通して、英雄的行為と結び付けて語られがちな投獄体験の公的なイメージと、必ずしも英雄視されることを望まない個人の語りが存在することが分かった。投獄を生き抜いた強い囚人という社会的イメージと、それにふさわしくないために表出されにくい感情や本音のはざままで苦しむ現実が実際には少なからずあるからだだった。現在のパレスチナ社会では今のなお誰もが逮捕や投獄の対象となりうる一方で、かつて社会が一体となって展開した民衆運動の担い手の層や、彼らを取り巻く環境は変化している。「昔は連帯デモにももっと人が多く集まった、関心も高かった」とは、囚人問題に従事する人々の間でよく聞かれた言葉だった。2017年4月から約1か月半続いた囚人による集団ハンガーストライキは近年では大規模な運動に発展したものの、約1か月を過ぎた頃からは、街なかで連帯テントを張って座り込みを続ける囚人家族のまわりで増えていく空席の方に世間の注目が集まった。元受刑者たちも、

かつてほど投獄体験がもたらす社会的な勲章は長続きせず、評価されない現実も感じている。とはいえ、公的な英雄像は今も存在し続け、個人が感じる投獄体験とのギャップは昔に比べて拡大しつつあると言えるかもしれない。社会の求めるヒロイズムと個人の認識にそのようなずれが生じているとすれば、それでもなお、社会が英雄像を必要としているのはなぜなのだろうか。社会として、また個人として投獄の歴史を記録するとき、何が語られ、何が問われないのか、そしてそれは現在のパレスチナ社会において何を意味しているのか、そこに英雄像の役割はいかに関係しているのか、そのような問いも含め今後の分析を続けたいと考えている。

#### <留学中の生活・研究でのトピックス>

滞在中は、東エルサレムのパレスチナ人コミュニティを拠点に西岸地区やイスラエル領内を移動した。東エルサレムと西岸地区はともに被占領地でありながらも、間にはコンクリート壁や検問で物理的に分断されている。西岸地区に住む人々は、イスラエル当局の発行する許可書を得ない限りは通常、エルサレムやイスラエル領内に行くことはできない。西岸地区に調査へ行き、自分ひとりエルサレムに戻って行く自由に当初は複雑な気持ちを覚えたが、交通機関で検問所を通過する時の兵士と人々とのやり取り、ほかの乗客たちの雑談など、些細なことから印象に残る場面にも多く遭遇した。住む場所の違いから特権的な地位を与えられていると思われがちなエルサレム住民であるが、実際はイスラエル当局による家屋破壊や住民権剥奪など、エルサレムコミュニティならではの切実さがあることも暮らしの中で見えてきた。その一つに、滞在中、まわりでヘブライ語教室に通うパレスチナ人女性がとても多いことが印象的だった。パレスチナ自治政府の権限が及ばない東エルサレムは、イスラエル当局の管轄下にあたり税金などの公的手続きにはヘブライ語の読み書きができた方が便利だからである。イスラエル側で仕事を探すにしても言葉は必須だ。ヘブライ語の習得は、パレスチナ人としてエルサレムに住み続けることが難しくなればなるほど切実さを増しているとのことだった（私もその後近所の女性たちと一緒にヘブライ語のコースを受講した）。ほかにも、所属先であったイスラエルの学術機関であるヘブライ大学では、パレスチナ研究を行うイスラエル人教授、東エルサレムやイスラエル領内に暮らすパレスチナ人学生、また売店などで働く東エルサレム出身の男性たちなど、様々なはざまに生活する人々と出会えたことはパレスチナ/イスラエルの持つ多様な実情を多角的に理解する貴重な機会となった。

#### <今後の社会貢献>

2017年7月、エルサレム旧市街のアル＝アクサー・モスクがある聖域の周囲に、イスラエル当局が治安強化対策として金属探知機を設置することに反対したパレスチナ人住民による、大規模な抗議行動が起きた。聖域に入る代わりに路上で集団礼拝を行い、歌をうたい、集まった人々に食事が配る人もいた。地元出身の若者が「こんな一体感初めて見た」と感心して言うような高揚感も生まれた。だが報道では「騒動」「暴徒」とまとめられ、間違った表記ではないにしろ違和感を覚えた。日本に帰国してしばらく経った現在、現地で吸収したことを振り返りながら、これらをいかにまとめ発信すべきかその難しさを実感している。滞在中は人々の日常に身を置き、言葉を介さなくても感じ取れる空気感や肌感覚を養おうと努めてきた。今後は、調査や生活を通して様々な時間を共有してくれた人たちの等身大の姿が伝わるよう、言動の背後にある様々な可能性を考慮できる理解力を深めながら、調査報告を形にすることで社会貢献としたい。



ハンガーストライキを行う四人の  
ポスター



刑務所へ家族面会に向かう朝



収監中の息子の高校卒業認定授与  
式に参加する家族



エルサレム旧市街の岩のドーム



パレスチナ刺繍



イスラエル領内に残るパレスチナ人の村の跡